厚紙で作った酸素マスク

No. 13

酸素マスク

看護用品の解説

厚紙で漏斗を作って，酸素マスクとして使用した。

看護用品にまつわるエピソード

昭和 29 年から 30 年にかけて（米国）陸軍病院に研修に行った時，壁から酸素が出ていたり，吸引ができたりしているのを見た時には驚いた。当時の沖縄では酸素ボンベや吸引器をベッドサイドに持ってきて酸素吸入や吸引を行っていた．それで酸素が壁から出ることや吸引ができることにすごく感動した。また酸素テントもあり，それを初めて見た時も，蚊帳かな，と思った。

研修を終えて沖縄中央病院に戻り（昭和 31 年頃），研修内容を上司（真玉橋ノブ総婦長）に報告したところ，「沖縄の看護は米国の看護に 10 年遅れているから，学んできたことを如何に沖縄の看護に生かせるかは，貴方方の努力による。相手の身になって良く考えて，良い看護をすることです」と話してくださった。

その後小児科病棟で働いた。小児科病棟では酸素吸入を鼻腔カテーテルで行なっており，患児が酸素吸入を嫌がっていた。そこでどうすれば患児に不快を与えずに酸素吸入を行えるのかを考え，陸軍病院で使われていた酸素マスクを思い出した。しかし酸素マスクなどないので，自分たちでそれに代わるものはないかと考えた。そこで厚紙を円形に切って，漏斗を作り，酸素マスクとして使用した。また検尿用の紙コップの底にカテーテルが入る位の穴を開け，そこにカテーテルを挿入し，酸素が漏れないようにテープでしっかりと固定して使ったこともあった。マスクはテープで患児に固定したけれども，経鼻カテーテルの時のように嫌がる患児は多くはなかった。

（西平富美子氏，2004）

解説

エピソードでは，米国陸軍病院では昭和 29 年には酸素吸入や吸引の中央化が整備されていたということであるが，日本国内で酸素吸入や吸引の中央化が整備されたのは昭和 37 年[1)]との記録がある。

1) 川島みどり：歩きつづけて看護，医学書院，P80，2000.

（金城忍，2004）